

社会運動におけるグローバルな意味とローカルな意味

——上関原発反対運動を事例として——

上智大学 龍野 洋介

「3.11」以降、さよなら原発 1000 万人アクション、脱原発世界会議、そして脱原発金曜アクションなどの、反原発運動が活性化している。こうした状況は日本のみに限らない。例えば、台湾では 2012 年以降、大規模な反原発運動が展開され、韓国でも「3.11」以降、反原発運動が継続的に行われている。このように、近年の反原発運動は複数地域で連鎖的に生じたグローバルな運動として注目を集めている。

このように展開される運動のそれぞれを見てみると、興味深い事実が浮かび上がる。すなわちグローバル(以下 G1)な「意味」、ローカル(以下 Lo)な「意味」の存在である。例えば、複数の国家で展開された反原発運動では「ヒロシマの記憶」にもとづいた「意味」が原発に付与されたことが、抗議活動に至る重大な動機となった。一方、地域に特有の要素にもとづく「意味」と、それに起因する動機があることも観察された。つまり、複数地域の人々が原発を「問題」とするための G1 な「意味」と、地域の人々が原発を「問題」とするための Lo な「意味」が見られる。本研究報告では上関原発反対運動を事例に、G1 な「意味」と Lo な「意味」を考察することを目的とする。具体的には、以下の問いをもとに議論を進める。第一に G1 な「意味」、Lo な「意味」を運動がいかんして獲得したか、第二にその源泉は何か、である。

この問いに対する解答を試みるため、社会運動の文化論アプローチを採用する。文化論アプローチとは「抵抗や運動の意味源泉と意味形成のプロセス」(野宮 2002)を考察する研究である。このアプローチにもとづき、まず G1・Lo な「意味」の源泉を措定する。例えば、G1 な「意味」の源泉については、チェルノブイリ事故などの出来事、核兵器廃絶キャンペーン広島会議などの国際会議、Lo な「意味」の源泉は地域の風景や記憶、生活などの要素が想定される。次に、これらの源泉と抗議活動に参加した人々が付与した「意味」のつながりを記述・分析し、運動参加者によって選定された源泉をとらえる。そして、G1・Lo な「意味」がいかんして獲得されたのかを考察する。本研究では運動参加者の声や文章などを主なデータとして用いる。これらのデータについては、①新聞やビラなどの資料調査、②運動組織参加者へのインタビュー調査から収集する。

分析の結果、以下の二つの結論を得た。第一に、G1 な「意味」の源泉の一つとして国際会議があることを明らかにした。この国際会議とは、2010 年の COP10(生物多様性条約国会議)である。ここでの上関問題に言及した議論や問題提起が、運動参加者が上関原発を問題として解釈し、抗議活動に至る動機を形成するもととなった。第二に、Lo な運動組織が G1 な「意味」を運動の目的に取り込むことにより、抗議対象や抗議活動の「意味」を変化させていく過程を明らかにした。

本研究の貢献は二つあると考える。第一に運動論研究への貢献である。人々の問題解釈という視点から社会運動を論じてきた研究にて見落とされがちであった G1 な「意味」源泉を考察する視座を提供した。第二に実証面での貢献である。原発立地地域の反原発運動は Lo な要素のみから活動の「意味」を見出すのではなく、G1 な「意味」を Lo な「意味」と並列させることで、抗議対象の問題性、抗議活動の目的を再構成していく過程を実証的に明らかにした。